素人早満奈飛　二編　全

生花早学二編序

夫生花の道ハ假初の藝能にあらず神佛に捧げ賓客を饗應の最初とするハ世人の知る所なり原来草木の雨露の恵ミを受て潤育を覚え蓓花の水の養をもて齢を保つを得る故に盆の大恩を観ると國恩の恵ミを重きを弁へ風作法を学ぶ恭敬辭遜の禮義を正しく思ひ邪なきに至らバ則ち勧善の一導とならんとしかく早学と題せし一味

冊を見るに生花の大意を始め主客の法を明らし出生および應活の秘事を詳らかに是を記め學ぶ者も尚奥の深きを明め未だ学ばざる者は師なくして極意を究むるの重寶なり素志あらん人熟読せば有益のことあらんかしと前よりいふところを述るものしるす

壬寅の夏　真萩菴老人

生花早満奈飛二篇目録

生花天地人三才之圖
○立昇せて生る枝を天といひ是を心といひ又体といふ
是を俗に立鱗の格と云
○水際に有枝を以て地といひ則ち陰之
是を相といひ又留といひ或ハ根〆ともいふ
○天地の間に有枝を以て人といひ是を戴といひ用といふ或ハ流しともいふ
天
人
地
○掛花番の時ハ此心を以て生べし
是を俗に横鱗の格と云
○置花ハ客の生る花
掛花ハ亭主の生る花と心得べし
○置花を真とし
掛花を草と心得べし
しかれども置花に真行草有り
掛花にも真行草有り尚委くハ
奥に記す
天
人
地

○生花之大意

夫陰陽和合して萬物を生ず獨陽不生獨陰不成とかやされバ萬物天地陰陽の氣を放れ一として成就せることなし故に花を生るも天地陰陽を本とし前に圖せる如く心と号け立登て押る枝を天とし陽とす水際の留の枝を地とす則ち陰なり両義相備りて中央に人の枝あり是を天地人の三才といふ此三枝を以て三才の体を調ふ其余五枝七枝九段十一段十五段に至ても皆三枝に添増ところにして三の體の余なし尤も二枝をもつて生る時ハ天地陰陽の両義のことをいふ説あれども二枝を以て全躰を備へる時ハ乃ち二枝の天地より自ら人の氣を生ずるなり然れバ二枝にして陰陽のことと心得さるハ非なるべし大枝二本たりとも小枝その中間にあり花一輪たりとも葉あり葉有て間を補ひ躰をなすといふ時ハ天地の氣和合して人を生るに異ならバ陰陽自然の理を知べし

○花を生る心得

花の入方ハ前にのぶる如く天地人の三才を本とし一二三大中小と定め花を生んと欲する時はじめに花器に對ひ花配を入べし但し花器の縁より六歩の下にて花くばりを入その所まで水を次て夫より花をいれ生おはりて後増水あるべし他家にて生て花を入る時ハ後の増水ハ亭主にこふべし

是ハ水際を見せる心なり然れども亭主不案内にて辞退あらば強てとふべからず自ら増水をべし又花配りハ木の插を用ゆべし槿の枝ハ性粘つよくして用ゆるに弁理なり然れども祝儀の席にハ用ゆべからずといふ説あり是全く槿花一日の栄といへるによりかく忌なるべし

花配之圖

○枝のまゝにて製へし図

○枝を割かけて製へし図

木の性もろきものハ深くさけて用ひがたし粘つよき枝を用ゆべし

花配入様

○風のあたる所にてハ根の留りを丈夫にすべし

○尤婚礼の花などハ別して根の留りを堅くすべし

則ち図の如く作りても又枝にても向ふへきつりと押へて動かぬ様に留べし

○枝ぶりの多少により或ハ筒の大小に随ひ配木の廣きをのぞ又ハ狭きを用る事ハ見はからふべし

○内の塗たる花器に花配を入るにハ枝の小口へ紙切を少しはさみていれべし左なき時ハ塗たるところに疵のつくものと心得べし

○四角なる花器ハ角を陽とし平を陰として上座床へ用る時ハ平を置べし下座床へ用る時ハ角を少し前に振りてして明へ向べし

○本勝手とのふハ花器ニ對ひて左の方ニ生る形の花をのふ逆勝手ハ對ふて右の方へ花の出るをのふ非勝手ともいへり

本勝手の花の圖 俗ニ右勝手ともいふ

逆勝手の花の圖 俗ニ左勝手ともいふ

掛花の本勝手の圖

掛花の逆勝手の圖

○竹花器の取あつかひ様ハ始よ能く水よ浸しく後切口をふきさく夫より花を入べし始ま水をせざれバ竹の肖えぜまれるとあり

又ぎんぐ切の筒ハ外の節の下りさる所を前とをべし

竹の表ハおのづから節ま勢ひありく肉厚し裏表をよく見定めさく生べし

○土器の取扱ひハ薬の流工合風流なる所を前とをべし

土器の類ハ露を打さく遣ふべし

○青磁の花器ハ露よ及ばズ

青磁ハ原天竺の土よしさく久しく笛よ入置とも湿ひすあるる故露を打をと禁ズ又唐土本朝ホの製の青磁よも其気あるゆへよ露を打こと同やうよ禁ズ

○金もの花器も露をうつべからズ

○籃花器ハ二月より九月迄取扱ふべし十月より正月迄ハ用ゆべからズ

○手の付さる籃ハ花よて見切とを禁ズ然れとも籃の花ハたつぷりと見ゆ支よ

○手のある籃ハ提さげて花をつくそ入さる心なれバ沢山よいろうまじく入さるも風流よくよし

入るを本意として然る時ハ花多く手を見切と有べし此時ハ除くへ苦しからずして真中より四歩六歩又ハ七歩三歩に分て三歩の方へ花をよせて入べし真中を見切ことを大に禁ず

○水の次加減ハ時に應じて次べし春秋ハ暑寒によらざる故九分目につぐべし夏ハ十分にして暑中ハ十一分に次べし尤筒の切口そとの廻りへ油を少し指にて塗べし又蘗の油あらバ最上なり冬ハ八分目寒中ハ七分目と心得べし薄端ハ中の筒ぢかに水を次べし

○諸草木の葉ハすべて掌を合せたる如く出生せる者なり

斯の如く中ハ陰なり外ハ陽なり又盛長して則ハ

葉のひらきたる所圖の如し

○葉開きて光ある所葉のうらなり
則ち天を受て開く所
地にして陰なり
是を葉の裏といふ
俗に日表といふ
又葉の下に成て
地に對ふる方是
天なり陽なり葉の
表といふ俗に日裏
と唱ふ

此所天なり

俗に日裏といふハ葉の表にして陽なり

此所地なり俗に日表と云
是葉のうらにして陰なり

○花の高さハ花器の高さに一たけ半を大法とす然れども些ハ高く

して二尺迄ハ苦しからず鱗の格の備へを失ハずして余ハ長く
とも曲りりくハ風流なれバ是をとがめず
○水際より蕾の葉枝の別口まくのす法ハ花器の口の指径しの寸
法を蕾の葉枝までの高さと心得べし 尤廣口のものハ格別なり
○廣口馬だらひの類ニ株分ましても入る時ハ木物なれバ谷間と
のぶ草花なれバ株を分けるといふ水草なれバ魚道と唱
ふべし
○水草ニ陸物をあしらひ陸物ニ水草を會釈ことを禁ず
若廣口ニ陸物水草を入る時ハ石をつかひて水陸の隔を
なし水辺の景色をかたどるべし

○五穀雑穀の類野菜の花ハ人の養ひニ成もの由へ
花ニ入る事を禁ず又悪き香ある花
尖針あるものの是ホの類をいむ
殊ニ客席ニハ必らず
遠慮すべし
○梅蘭ハ香氣
芳しき花なる
故これを生る時ハ
香を焼ず香の席ニハ
梅蘭を生べからず

〇四時草木養ひの條

草木の養ひハ時候ニ應じて養ふを本意とす則ち真草行に分つ先真の養ひといふハ五六七の三箇月なり押五月夏ニ至るより萬物生ずるもの裏ニ陰を含ミ表ニ陽を發せるを以て陽中の陰とす陽ハ藥陰ハ毒なり又毒變じて藥となる事有り陰ニ陰を重ると是まさに毒なり冷さるニ暖なるを逆る則是藥と知べし此真の時候ハ草木の中ニ陰氣ある故ニ手折切て冷水ニ入る事を禁す伐るまゝにて暫らく置性の些し衰へるを見て養ふべし

〇真のやしなひハ凡そ其分量水一升の中へ艾一合ばかり山椒一勺ほど入て能く煮じ八合目ニ煮つめ其熟湯の中へ草木のきり口を一寸ばかり入て白くなる程とくと煮すべし

但し草木の莖を馬蘭の葉にてつゝミ花葉ニ湯氣のかゝらぬ様にすべし能く煮て直ニ冷水にさめぬ中に浸し真直ニ立をき風のあたらぬ様ニ二時半立をくべし三時半ハ陰陽の通ずる尅數なり

○行の養ひハ二三四の三月と八九十の三月となり此六箇月ハ時候
中分にして和合なる由へ火にて養ふべし則ち手折伐たる草
木を切口より二三寸上を馬蘭の葉にて巻堅炭を強き火
にして其中へ山椒ぼし花の多少を見合せ加減して火の中へ入
草木の切口を五六分ほど火に成ほど焦と焼べし焼て後直に
冷水に入て真直に立三時半ほど生けて置べし
○草の養ひハ霜極正の三月此時候ハ極陰にして裏に陽をふく
む故に表に陰を發ス是陰中の陽なり冬ハ萬物裏に陽
氣ある由へに損ずることもなし又性のよき草木ならバ
火にてやしなはずも有り是ハ裏に陽の薄きと心得べし

性盛んなる草木ハ陽氣を禁ズ汲をきし又ハ流の水ならバ
最上なり随分冷水に入て生こむべし井水の汲立ハ陽氣あ
りて温なれバ必ズ用ゆべからズもつとも火氣ある所などの辺りハ
遠慮すべし
○水草ハ真の時候なりといへども陰中に生ド裏に陽氣を
含む故に養ひ方別に記ス
○草木ともに朝夕に伐とるべし惣じて日中にきりとれバ
枝葉のしほるゝ養ひがたし日光のつよく當らざる時を
考へて伐とるべし
○牡丹を養ふにハ伐とりて直に根を打砕ぎ煮湯に根を

さし入て煮べし是則ち前にあるは真のやしなひなり
夜の席の時ハ早朝に伐とり右の如く養ひて根ハ水にいれ
日の陽気のいらざる所におきて桶筥のたぐひを覆ひ
置べし土蔵などに入おくもよし七ツ時すぎに取のくべし
生る時ハ夜花ひらきて客の馳走となる又昼にても早
朝に伐とる時ハ花ちいさく開く五ツ時に伐とる時ハ花
大きく色ふかくなり然れども花ハ大きくひらくよりハ少く
ひらく方風情ありてよし

○藤ハ原来水を上かぬる物なり是ハ切口をわり艾を挾て
よく焼てそれより直に水にいれ三時半をくべし

又根を打ひしぎて煮さる酒に根を入ひさし
酒の気の抜る
ホど煎て
後冷水に
深く浸し置べし
入おきて後
花器の中へも
酒を些し
差いるべし

又巴豆を水ニ煎じ出し能ひやし置きりとりたる根をその水ニ差入ておきて生るもよし　尚この巴豆の水を花器の中へさし差加へ入べし

○椿の花ハ臺と花びらとの間ニ水気なき故花落るなり是ハ花の臺ニ塩を女し差入おくべし　又塩水ニても　よし潤ひ有れバ花落ることなし

○芍薬も真のやしなひなり　根の煮くされさる所ハ切すてゝ生べし

又遠方より持きたりて葉の志ほれさるも右の如く水上とをし葉ニ水をうけ一夜露をうくる時ハ本の如く勢ひつよく成なり　花きりとるニ鉄るいを忌べし　真鍮ハ苦しからず　又生る花器も鉄銅を忌べし　竹土器のたぐひよし

○水葵澤瀉の養ひハ番茶を濃せんじて能ひやし是を切くちより水上筒ニて水をこみ其のち水ニ浸して養ひをくべし

右ハ竹ニて製する器なり尤金ニて製せし具堺表ニ有り

○葭の養ひハ水に塩を少し入て葭の切口より水をつき込て夫より水に入て養ふべし

○河骨ハ石膏を少し入右のごとく伐口より水上筒にて強くつきこむ時ハ葉の裏へ水の通る事又志るゝなり左葉へ七歩ツヾこのり通りぬる時を度とし些し葉際に通りさる許つよくハ保ちがたし

○極暑にハ上茶をせんじ出し人肌ぐらゐにさまし入べし秋の季にいたりてハ石膏を水に調合し其上にせんじたる茶を合せ人肌ぐらゐの温まりにして水上筒にて突こむべし但し茶のせんじ様ハうすき方よし濃ハ氣つよくして葉のくさる事あり心得べし

○水なき瓶又ハ紙の折形などに生るハ前のごとく茶にて水をあげ井戸へ下をく事半時よして取いだし根を糸にてく腔らとしめ枯るべし是ハ莖葉へ入し薬氣の洩ざる仕法なり

○紙の折形に生さる図

右の如くして折かたなどに生べし一夜ばかりハ一日ハ持もの也

○是を水なしの河骨と云則ち秘傳なり

右河骨ハ余の草ニ倍し水上もなりがて難しき者なり水上
全くとてなひて後井戸ニ下て冷もべし又取あつかふにも手の
温まりにて凋るとあり其こゝろへ有べし
〇蓮ハ葉をよく見立るべし至つての古葉又ハ巻葉の不くれ
たるむらりの新葉ハ持がたし且切とりて遠方より持来
又ハ切て半時も間ある時ハ養ひがたし、伐とりて直ニ根を
煮湯ニさし入とくと煮べし但し煮ニ花葉ニ火氣湯氣
木のかゝらぬ様ニ取あつかふべし夫より冷水ニ入おきて根の
煮ざれざる前ハ切まで扨亦前もつて胡椒の粉を水ニ
浸しおき此水を根の切口より強くつき込べし尤花巻葉なと
水を入べし尚とりあつかひハ惣て水中ニてすべし
手の如くなどニて萎る者なり
切口ハ志ばらくも水を
放しべからず尤蓮ハ
草の中ニて殊更
養ひがたき者なり
然れども右の養ひ
ニて三四日ハもつものなり
〇朝顔のやしなひハ根を煮湯ニ
差入それより冷水ニうつし置て後生べし

○亭午に花を開かするにハ明日
開く花を早朝に切とりて
右の如く養ひ井戸に下をき
又ハ桶籠の類ひにて風の通らぬ
様にふせをき客来りて生べし
又桶籠に入て腔と蓋を
するもよし尤根ハ
水に差入をくべし
日さし遠く冷る所に
囲ふてよし然れども據なく咲する事也

半時ばかりならバ持ぐさし
○太藺の養ひハ食指と巨指とにて一本づゝ挫ぐべし末のかた
一尺ばかり残し夫より一固によせて水をかくれバ分ちバらして
付ものなり又澤山に生る時ハ天人地と分て末ハ其侭にして
別れ口の所より外し巻うけて別くに花ごしらへをして三
段五段或ハ七段九段と段取よして次第によせて巻もとハ一ろ
緒に巻なり尤木綿布などにて巻べし如此して後末を
下にして根本より篤と水をこのけ水氣ある辺ハ又ハ深き
桶に水を入て是に生て一夜露をうけて翌日花に
入んと思ふとき又根もとより水を掛て生終て のち巻

なる布を取べし廣口に生る時ハ下簾板を拵へ穴を明て竹
の筒を入て太蘭の根メりを能しく生べし板の上ハ砂どめ也
或ハ太蘭の切株二株ながら魚道を分て入るもよし是ハ水より
二三寸あるひハ一寸ながら水の上に見ゆる様に切て入べし其切
株の中に穂先の所四五寸ひつじ生に入べし又天地人の飾
石をつらふ 石のつらひ方ハ三篇に委しく著は 尤水草の花ハ横鱗に景色よく
會釈べし又早細工にハ何本にても長短をつけ揃へて中程
を紙捻にて結び根七八寸の内へ鬢つけ油にて附べし尚後
より遣ひたき所あらバ一二本づゝ表へ油のみへざる様につかふべし
○燈心草ハ一緒に集めて手にてよく鋏もて天人地と末をヱ
けて布にて巻一夜水に入おき翌日生るなり又生る時根元
より水を能うけて後巻たる布をとるべし
○蘭の類ひハ大株小株と魚道を分て生べし又花なき時ハ
水草の花を會釈べし何れ蘭もの
一株生る時ハあしらひの花を
そうふと心得べし
○槖吾蕗ハ水の上にまくき
草なり行の養ひの時ハ
切口へ艾を一つゝ付て一本づゝ焼て其侭水に
深く入三時斗ながら置べし水上て後水に浸し生べし又花のある

時ハ根を揃へ燈油を切口へつけ火にて焼べし夫より焼くされざる
所を切捨て冷水にさし入おきて後取出し生べし
○南天を曲る時ハ熱き灰に入るか又ハ火にて温め
曲て其まゝ冷水に入て冷せバ撓口を緩めるとも
戻る事なし又紙に酢を浸し少し絞上て
巻つけ火にかけて強く焼バ心の侭に曲つく也
去ながら強く取扱ふ時ハ折るなり又結びて
遣ふにハ大根をおろし酢を加へ鍋に入て
能煮たゝせ結だんと思ふ所を其中へ差入つよく
煮て後おもむろ静に結ぶべし尤南天のぬ助よきを見立ふし有ハ

用ゐべからず楓其余葉のまがりたる物を撓るにハ濡たる紙にて
巻蝋燭の火にてため其侭水中へ葉もろとも深く入べし
○萩ハぬるき湯に根をさし入おき其湯水の如く冷てより生
べし又生んと思ふ花器へ湯を入て其侭生をくもよし湯
冷るに随ひ次第に水を上るなり
但し湯加減ハ指を差いれて慄らるゝ程の加減を度とす
○時ならぬ返咲の花ハ客席に遠慮すべし時候の本性を乱
なふ道理なり其時候の花を生て返咲を賞ふハ苦し
からず室咲寒紅梅冬籠の梅ハ會釈を遣ふを禁ず又
澤山に有とも數多く入る事無用なり

○舟一式取扱ひの事

○舟ハ初ニ釣手の鎖を見るべし艫より舳先まで當て見て短き時ハ釣手を花よて見切ても是を許ス又釣手定法ならバ見切ことを禁ズ又舟の中ニ下苣板なくバ板の上ニ水の乗ことを禁ズ水見れバ愁ひの舟と心得べし

○出舟の取つりひハ上座床ハ陽の床ニして則ち明口ハ陽也舟の舳を明口へ向て床柱の方へよせて床の中へ釣べし尤舟の居どころハ床より三尺下つて座して目通りを居どころと見定め釣べし是出舟の入方なり又花を入る時ハ艫の方へ寄て艪花をおろし尤舟の際ニて横鱗の格をさだむ

べし夫より下口へ下りさる花ハ水中の花ニて手弱くして水ニ流るゝ形自然なり

○此舟ハ出舟ニて往来の舟と心得べし

○釣手の中ニ竪ニ入さるハ則ち帆花之是を走舟と云

○帆花と艪花をともニ入さる圖

○舟の中に横鱗の花を入舳の方へ寄せて舟の向ふへ打こして前方へ
曲回る技を水に流るゝ形に綱花おろしたるを掛舟といへり
則ち上座床なれバ出舟の入方之下座床へ入るときハ
入舟なり又上座床にて入舟を入る時ハ臺目に
下て釣べし

○何ずくも舳先こゝろ人の右によれバ出舟也

○舳先左による時ハ入舟也

沓舟の圖

○沓舟ハ床に釣ことを禁ズ
則ち床ハ
二畳て臺の形にして上段とも称ゆべき
所なり故に沓に象る物を置ズ

○置舟ハ泊舟にして
花ハ横鱗に入べし
もつとも舟ハ切形も別也

○惣て床の畳へ踏ことを禁ズ尤花手前の時又ハ掛物掛なをし等
心得て立まはりすべし沓舟なども臺目に下げて釣手ハ自然とすべし
○鎖釣瓶ハ床へ三瓶をくべし陽の釣瓶ハ角を些し前へむけてをく
置べし陰の釣瓶ハ平にして明口の方へをく手両方とも横一
文字なり敷物ハ花臺薄板を用ゆ板床ならバ薄板無用なり
一置の釣瓶ハ床にをく時ハ陽の釣瓶にをくべし臺目にをく時ハ
陰の釣瓶なりと心得べし
○組釣瓶ハ床を禁ズ敷物ハ釣瓶のそづし縄又ハ車薄のこも
用ゆべし尤縄をつかふ時ハ渦に巻て用ゆ上座床の座敷
ならバ臺目にて左旋に巻べし下座床ならバ右旋に巻べし

釣瓶の組やうハ陰の釣瓶を下に平にすへ其上に陽の釣瓶をさして
みな違へて組べし図の如し
但し釣瓶に花を入る時ハ下筒板を拵へ四角に大小の穴を明て
都て水の通ふところに花を入るゝ
亦上の釣瓶の花大きくバ下の釣
瓶の花をもて小風に生べし
下の花大きくバ上の花を小風に入べし又隅に花配をいれて
生るもよし

○井筒引上釣瓶ハ下に井づゝを餝り上に車をはり井筒の
上に置たるハ陰の釣瓶上に引上たるハ陽の釣瓶なり井筒の隅に置
たる陰の釣瓶ハ水ハ四季ともに順して次べし又上にある陽の釣瓶ハ
水の見ゆる事を禁ず
右釣瓶を花にて見切ぬ様に
もべし

○春の花の生方ハ
発生の姿なれバ花に衰へなく

枝葉青々として花の中に枝葉おほく麁しく生べし

○夏の花ハ殷茂の姿殊更に際に水を司る葉を入て水ぎハ涼しく半途より下花葉多く生べし併ながら混雑して多く入る事ハ無用なりとて花形やさしく生るをもつて夏の氣に應ずる所といふべし

○秋の花の生方ハ半枯の姿にして花形閑栖に淋しき所に風流有りとて詠めいやしからざる様にいるべし

○冬の花の入方ハすべて人の氣極寒に恐れ陽氣有る所に進む故に冬ハかへりて真の入方なり水際閑栖にして半ハ枝葉中分にいれ末おもる勢ひを入べし是真の入方なり又一年

十二ヶ月の節四時の季に應じ花の本性を察し時の季節を量り違ハざる様に入るを以て肝要とす

○五節句式日花の生方

○正月元旦にハ松を生べし七五三の入方にて則ち注連の傳と云若松にて始に人の枝をいれ夫より又人の添枝を入るなり始の人ハ陽なり添ハ陰なり陰陽と二本いれて夫より天の枝を入又副をいれ天人と調ひて其間へ一本松の葉をむしりて緑むこのりにして入る是を胎りといふ夫より地の枝をいれ又地の添枝を入る則ち天地人の三枝おのおの副の枝の陰を加へて三ツともに陰陽となる是天地人の三才なり緑の松に五体を

備るが故に是を五とし松の枝が七本なるを以て都合七五三の入方といふ

元旦の松七五三入方の図

○松ハ元旦暫礼家督ぶるまひ等に生るものなり

平日にハ生ることを遠慮すべし

○松の拵やうハ若松の随分長きところを穂さきたゞあり取よせ右六のえだを懸く

究め本の方の葉をむしり軸の方を藁にて土をつけて水にて能く揃へバ美しくなる又海蘿をよく煮て水漉にてこし松の葉にぬりて藁にて養ふ松の末四五寸二三寸見合せにて海蘿をつけれバ末ひらきにまくべし心の軸ちぢみなバ継ても甚しく見へぬやうにつぐべし尤春より四月まで八緑ハ多くまつほなる者なり是ハ海蘿を水に浸しをきて伐さる根なを其水に差入をくと半時あるひハ一時ましもく取りぐし生べし又生おもうて花器の中へも此上水をまとし差入をくべし

○二日ハ竹を生べし竹の養ひやうハ伐とることを早朝が夕晩よし古竹ハ水もちあしく若竹ハ水持よし尤四五月ころハ若

葉吹のざれ時ハ養ひなく生るとも枯るゝことなし極寒早春甚暑のせつハ養ひむつかしき者なり

竹養ひの圖

圖の如く節の所のごを錐よて穴をあけ其穴より水をさし入ることいるゝ暑中寒中よハ酒をさしいるべし酒よても水よても其潤ひの有るうちハ枝葉しほるゝ事なし

但し水さし様ハ水又ハ酒よても口中よふくミ吹こむべし十分よ差いるれバ勢ひ一しほよし

○苦竹紫竹淡竹孟宗竹等ハ右の通の養ひよくよし

漢竹鳳凰竹篠竹等ハ伐とりたる根を煮湯よ差入て煮とめ夫より冷水よ入をき後とり出して煮くされたる所ハ切すて生べし九月頃より翌正月二月ごろまでハ右の如く養ひて持なり其余ハ養ひても持がたし

○圖の如く青竹をきり枝葉をつけ花生とするには節の間又上下に水をさしおく故に一ヶ月ほども枯る事なし是を青葉の花器といふ

惣て竹類は伐とりて直に養ふべし間あれば養ひても持ず切口より氣を發するゆへ弱きなり

○三日は梅を生べし

○三月節句の花は桃なり葉を重にして生べし咲さる花はみな落し閑靜に生べし小枝なくして直にのびる枝ならば前に三本用の枝をいれ又體にも一の添二の添と三本いれる二の添に花の開落と交て五輪むつり遣ふべし花の數は半の數にして夫より根〆の留一二の添を付て三本入るなり尤も桃ならば用の枝に花なし内の副枝に花五つあらんむつり遣ふべし又惣体に葉むつりの枝にして水際に花二三りん尤も勢ひよく生るもよし此節句は雛の花澤山に有ものゆへ床には閑靜に生てかへつて風流なりなぐし八重桃は生べからず八重には毒ありと一重は

能有て薬なり　○桃花ハ悪鬼を殺し大小便を利も功ありといふ

○五月節句の花ハ菖蒲の葉三枚を用とし夫より短く実分の葉など二枚つかふべし又體ニ花菖蒲を入る花ハ二輪ニても面白く作意を以て入る物なり其後留の葉を生べし花二輪葉七枚葉ニて三才をとるべし花ハ蕾とひらきと陰陽ニ入開三りんならバ蕾二りん又開二りんならバ蕾三輪葉ハ祝儀の葉菖蒲なり

○葉菖蒲ニ蓬をそへて遣ふ時ハ始ニ葉菖蒲を五枚生べし尤實の葉をそへて入それより艾二本生るなり菖蒲ハ極陰の草艾ハ極陽の草なり則ち陰陽の匂ひ和合せと心得べし

○菖蒲ハ蛇毒を解し功あり蓬ハ御祭乱の草なり共に邪を除くと云

○菖蒲の實分といふハ葉菖蒲ハ五枚のまん中ニ實の出生せるものなり故ニ三枚と二枚とのあひだニ實の出るところまで少し明て入る又年ニよりて五月節句ニ菖蒲の葉ニ實の出生せざる事あり其時ハ出生のまゝ実をつけて生べし

○七月七日の花ハ桔梗苅萱女郎花の三種を生べし尤天地人の三才ニ生る始ニ桔梗を用ニいれ苅萱を体ニいれ留ニ女郎花を入るなり体ニいれる苅萱の中ニ桔梗のちらくと有やうニいれべし然れバ苅萱ニて桔梗の花を見切とも有るべし是ハ其姿風流なれバ許せべし又桔梗の花を体の

苅萱を見きることあり是も花形に風流あれバ許すべし
○七夕に伐竹を生ることあり平生にても伐竹を花に入る時ハ
陰陽と二本入べし陽の竹ハ末を斜に手ぎはよく伐べし
陰の竹ハ末の切口を平にすべし陽の竹ハ三ふし陰の竹ハ二ふし
都合二本にて五ふしなり陽の竹に枝を二えだおきて体用を備へ
陰の竹に一枝おきて留のえだとし則ち三才ことに備る葉の
透し方ハ用のえだにハ三まいづゝ出さる葉をつかふべし但し
二まいの中により葉の出さるも用ゆ且芽吹の葉をおほく
遣ふべし体の枝ハ二枚の葉を些くつかひ三まい出さる葉ハ
芽吹の葉を数おほくつかふべし留のえだにハ二まいの葉を
多くつかふべし三葉ハかづおほく透をすべし葉の形に魚尾金
魚尾飛鴈ホの名あり圖の如し

○魚尾
二枚葉なり

○金魚尾
三枚葉なり

○飛雁

是をより葉と名

○生花竹を二本いれ五六月の頃なれバ笋をあしらひに入てよし
笋八寸法一寸八歩株を上げて些し前へむくめて會釈べし

○竹を取りつかふ時節ハ陰起りて陽通づる時候をもつてよしとに月ハ則ち五六七月なり尤五月の頃ハ筍を去し株分にして會釈べし是竹の子の生出るところを愛して生るなり尤竹の子ハ天を貫ぬく形に出生するが故に女しも詠にハならんと心得べし然れども花器ハ廣口盥の類すく砂留なれバ石を用ひ石につけて筍を横の方へ出すべし又筍成長して後葉枝の青々としたる若竹を愛して七月に生るなり

○八朔の花ハ何にても白き花を生るものなり

○九月節句の花ハ菊の五色を入べし先体に白菊をつかひ体のそへに黄菊をつかふ用に赤をつかひ留にも紅ひの小

菊をつかふべしむ黄の菊をたつとぶ事通例にして流義によりては
説まち〳〵なりといへども黄を白の下につかふ事故ありとする八後
篇に著べし且三色をもつて五色の入方と称せるハ葉の色の
青きに薄板花臺の黒きを加へ五の色をとゝのふ是亦ハ生
花者流の秘傳とせる所なり
○婚禮の花ハ松と竹とを生べし松ハ元日の通にして客位に置
則ち明口にをくなり竹ハ陰陽の二本竪鱗にして三才を備へ
主位に入るむ床柱の方へをくべし花器花臺ハ對にもすべし
尚相生挿の事又有り三篇に詳にす
○元服の花の入方ハ白玉の椿を一色生べし花ハ莟開たるをのぞく
五輪葉ハ一りんの花に三枚の割をもつて十五枚つかふべし又挟を
葉花押といふ事有り挟を葉といふハ花の下に二葉左右へ出さる
葉をいふ花おさへといふハ花より高く出さる葉をいふ又花よ
りも下にさがりて性よく上りさる葉をも花押といふ是ハ別に
好みて拵ることなかれ又嫌ふといふにあらざれども葉の称を図に
記そのうへ花器ハ金もの土器のたぐひよし

花押の葉の図

挟葉の図

○新宅移徙の花の入方ハ花器ハ二重ニ入べし尤置花ニまさるべし始て下の口ハ花くだりを入上下ともニ氷草を生べし夏ならバ白蓮四季咲の杜若いづれ白を第一とし冬ハ陰物なれども水仙をつかふ水といふ文字ある故ニ下筒へ花をいれて上筒ハ水ばかりにすべし此時ハ時候の差別なく上筒ニ水のあぶるゝ程つぐべし新宅の花ハ水をいふ心なり赤きいろハ火ニ属する故ニ禁ズ但し黄ハ苦しからズ

○佛事追善の花入方ハ体ニ枯木をつかひ其下へ四季の花を何ニよらず癖なくすら〳〵と安らかに入べし尤一周忌三回忌七回忌までハ白き花を用ひ余りニ風情を造らズ如法なる

生方をよしとし年回遠く成ニしたがひ花ニも風情をつくりて生べし五十回忌よりハ色ある花を用ひてよし中陰の花ハ枯葉を會釈風情をつくらズ如法ニ物さみしく生べし飯咲残花などを禁ズ

○尖針あるものハ都て調伏の花なれバ客席へ生ることを禁ズ會席獨楽ニ生る時ハ三光を備へ生べし三光の枝葉あるときハ調伏ニならズ三光ハ地水火の三ツなるもち日月星なり此枝葉遣方ハ先用の葉添の葉留の葉この三葉を大中小と備ふ三光備りて萬物生ズ故ニ凶を變じて吉となす但し用の葉ハ大を用ひ添の葉ハ中をつかひ留の葉ハ小をつかふべし尤何にても針ハ取べし其侭ニして然るべし薊のごとく三光の取方

圖のごとし余ハ是に准じて入べし
○薊ハ圖の如く葉にて
三光を取べし
養ひ方ハ
伐て暫く
日にあてゝ
柔らぎたるを
思ふまゝに曲て
竹に結つけて能やしなひて後水に深く浸しおけバ舩水を上
べし ○木物の枝にても葉にても尖あるものハ形によりて下まろく

三光を備へるなりまうし五徳の足のやうに同じく並ぶハ悪し
○神前の花ハ慶喜縁ある花を生べし尤祝儀に用ゆる花
同様に心得べし勢ひよく蒼がちに水際すぐしく生べし名の
悪き花満開なる花時におくれたる花枯枝られ葉虫くひ葉又ハ
死花死葉針尖あるもの赤色を嫌ふ且榊を生るもよし裏葉
なき様に心得て入べし
○佛前の花も大概右の心得にて生べし
○床一式こゝろ得の支
○床にむかひて見るもの右に床左に違ひ棚とあれバ是則ち上座
床とするべし又右に違棚左に床とあれバ是を下座床といふ

遠ひさあれくとも襖壁または押入など有る方を遠ひけるると心
得上座下座を見定むべし又棚の方を臺目ととなふ事有り
都て下座床の立まはり逆手まへとなるなり依て主客の
差別有るなり心得べし

○床に置花を生る時ハ畳床なるバ薄板花臺を用ひをき
様ハ真中より一寸ばかり向ふへよせて置べし又板床ならバ
薄板を禁ズ

○卓下に花を入るるときハ其間に余の花をいれる事無用なり
又床柱に掛花までも入る時ハ卓下ハ水ばかり入ておくなり上
座下座の圖左の如し

○床柱の折釘ハ巨指と食指とをひろげて床縁の上より六寸ハ目に
り打なり正面の中釘ハ床の地板より三尺六寸上に打べし

○柳釘ハ床柱の向隅落がけ見通しに打なり

○舟の釘ハ床の長さを三ツよりして床柱の方一分の真中又向と前との真中の天井へ蛭釘を前向に打なり

○葛釘ハ落掛の真中の内つらに打べし是ハ不

床柱

此所三割一分の真中なり

奥行も向ふと前との真中に蛭釘を前向にうつなり

舟の釘うちやう右のごとし

浄除に蘿葛を掛ることなり立花器に生るになし只かづらを掛る釘なり此葛ハ神代よりの故事なりとて今尚加茂の社より大内に奉ることなり委しくハ三篇に著すべし

蘿葛之圖

本を鳥子紙にて包み山草薮橘を添る事なり

玄紙ハ色目重を用ゆ

尚飾方ハ三篇に出れ

〇夫花を生る時ハ我風流氣色おのづから花形にあらはるゝなり故によく身を脩め心を正しくして花を愛し仮初にも疎略に取あつかふべからず第一貴きを敬ひ賤しきを謾らず泥んで産を失ふ事なく自身の業を專らとし其閑暇を以て生花をたしなみ賓客来臨の饗應に備ふを樂しみ原来花器の貴賤を論ぜず得がたき器物珍しき花に金銭を費すべからず只爽にして駁雜ならず清く生て身のほどくに樂しむを本意とす尚こゝに洩たる秘事奥儀ハ挙て教へがたし委しくハ第三編に著すいづれも生花をたしなむ者心得ずして協ざる事のみなり閲して其深切を知べし

生花早學三篇

○二編にもれたる養ひ方生方の作法幷花留師石三才の遣ひかた花器花臺の寸法專七種の組方ホを委く著す

同　四篇

○南性北性の梅臥龍梅の生方縮柳玉川山吹八ッ乞し杜若の入方葉もの蔓ものゝ右旋左旋陰陽の故實を委くす

同　五篇

○實もの生方草木三躰の性あるひ強弱差別の心得生方盥觴の故事出生の極意故人の諸説を委く著す

天保十三壬寅年十月

大阪心斎橋通博労町　伊丹屋善兵衛梓